

「パラネット 2025 年パラスポーツ・メディア情報分析調査」
結果

2026 年 4 月
一般社団法人パラスポーツ推進ネットワーク

1. 調査概要

- 調査対象期間： 2025年1月1日～2025年12月31日
- 対象媒体： Webメディア4,000媒体
- 調査項目： 本調査では、パラスポーツに関するWebニュース露出を多角的に把握するため、5つの調査項目（プロジェクト）を設定した。
- 「<パラスポーツ>プロジェクト」
パラスポーツ全般に関する報道を対象とし、競技横断的な露出状況を分析
 - 「<パラスポーツ基幹大会>プロジェクト」
パラリンピック、デフリンピック、全国障害者スポーツ大会、アジアパラ競技大会に関する報道を抽出し、大会別の関心度や露出特性を分析
 - 「<パラリンピック競技>プロジェクト」
夏季・冬季全パラリンピック競技を対象とし、競技別の露出量や話題性の違いを分析
 - 「<競技以外露出>プロジェクト」
体験会・イベント、テレビ等メディア出演、地域活動、表彰など、競技以外の文脈での露出を整理し、パラスポーツの社会的広がり分析
 - 「<パラリンピック・オリンピック比較>プロジェクト」
パラリンピックとオリンピックの報道量や関心の違いを比較し、社会的認知の差異や特徴を分析
- 分析項目：
- 記事件数
Webニュース記事の掲載件数。メディアが関心のある内容、または企業・団体等の発信者がPRしたい情報が何か分析
 - 仮想PV
Webサイトが公開している月間総PVに、サイト構造、掲載期間、被リンク、SNS拡散、掲載位置等を加味して、Webニュース記事ごとに算出した値（特許第7098122号）。どのような記事がより見られやすいかを分析
 - ポスト数
Webニュースの記事URLを含むX（旧Twitter）のポストの件数。記事がどれだけ拡散されたかを分析
- 調査手法： 株式会社トドオナダが提供するPR効果測定ツール「Qlipper」を活用

2. <パラスポーツ>プロジェクト調査結果

パラスポーツ全般に関する報道を対象とし、競技横断的な露出状況を調査
記事件数・仮想 PV・ポスト数の各項目において分析

2-1. 記事件数として大きな話題

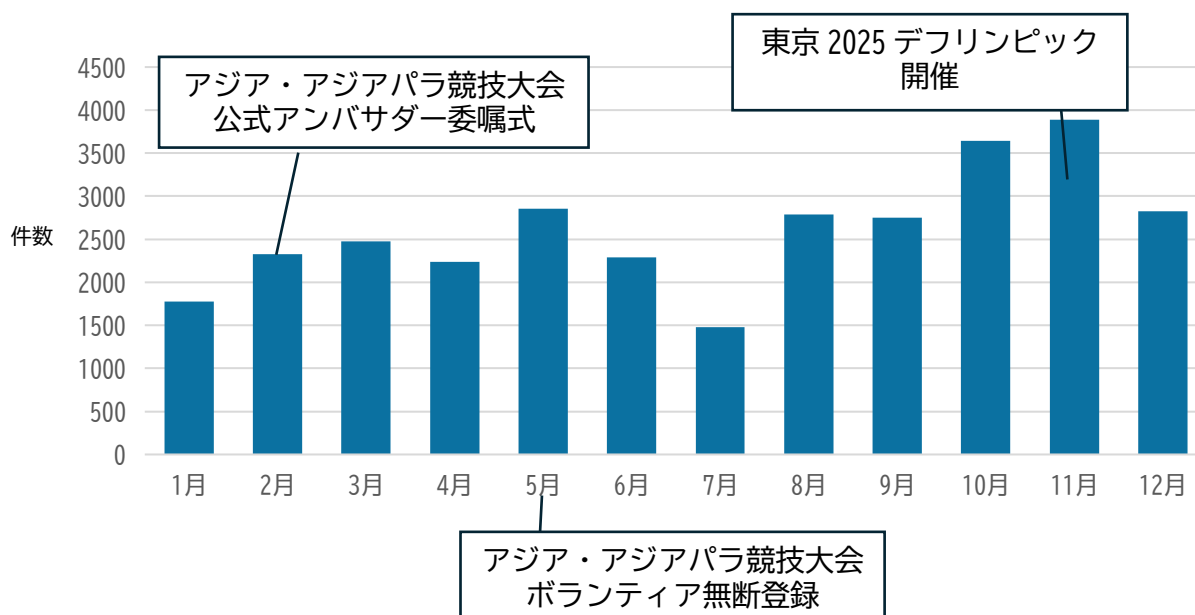
AI により、年間の記事件数や仮想 PV 等、影響力の大きなワードを検出した。

上位に入った5ワードは以下の通り。いずれも年間を通して検出されていることで上位に入ってきたが、「パラ」「ボッチャ」「車いす」に関しては、特定の出来事に集中することなく、さまざまな記事内容に含まれている。

	ワード	記事件数	仮想 PV
1位	デフリンピック	3,734 件	16,127,431 pv
2位	パラ	1,458 件	8,043,908 pv
3位	ボッチャ	804 件	5,081,590 pv
4位	アジア・アジアパラ競技大会	765 件	4,279,042 pv
5位	車いす	523 件	3,964,403 pv

下記は月ごとの記事件数のグラフ。「デフリンピック」と「アジア・アジアパラ競技大会」に関しては、新たな発表のある月や「○日前」といった節目に多くの記事が掲載される。

「デフリンピック」は8月以降、選手決定などのデフリンピックに関する情報で記事が増加し、開催月の11月に最大件数を記録した。



1位：「デフリンピック」3,734件／16,127,431 pv

11月の東京開催に向け、開催年に入った1月から大会概要など多くの記事があった。企業による協賛・スポンサー契約の発表や、各地でのPRイベントに関するプレスリリース配信が多い。

5月以降、開催直前までは、代表内定に伴う壮行会や知事や母校への表敬訪問など、選手の関わるイベントに関する報道が多い。10月に入ると応援イベントの参加者募集なども見られた。

開催前日の11月14日の日本選手団結団式の報道以降、記事件数が一気に増加。期間中は結果速報がほとんどとなる。26日の閉幕以降は、出場選手が登場するイベントなどの報道のほか、大会運営に関する総括記事が12月末まで続いた。

2位：「パラ」1,458件／8,043,908 pv

「パラアスリート」「パラ競技」「パリパラ」「ミラノパラ」「パラ〇〇（競技名）」など、「パラ+既存の言葉」の組み合わせが多く、パラスポーツを象徴するワードとして多数の記事があった。

配信サービスを利用した企業・団体によるプレスリリースも見られるが、特に新聞などのメディアにおいては見出しで端的に情報を伝える必要があるため、記者が意識的に「パラ」というワードを多用していると思われる。このことから、「パラ」という単語が浸透していることがうかがえた。

3位：「ボッチャ」804件／5,081,590 pv

年間を通してさまざまな団体が、障がいへの理解を深めるイベントなどでパラスポーツの体験としてボッチャに触れ合う機会を提供している。同様に競技大会に関する情報も多い。

また、誰でも楽しめるシンプルなルールであることから、婚活イベントでの体験や、ロボット技術を組み合わせた「ロボッチャ」、新しいスポーツとして「モルック」と共に体験できるイベントなど、パラスポーツの枠組みにとらわれない新たな取り組みも見られる。

取材した各メディアによる記事も多数あるが、主催団体などによるプレスリリース配信も多い。

4位：「アジア・アジアパラ競技大会」765件／4,279,042 pv

2月には公式アンバサダーの委嘱式を開催。松平 健さん、大久保 佳代子さん、武井 咲さん、アイドルグループ INI が就任。

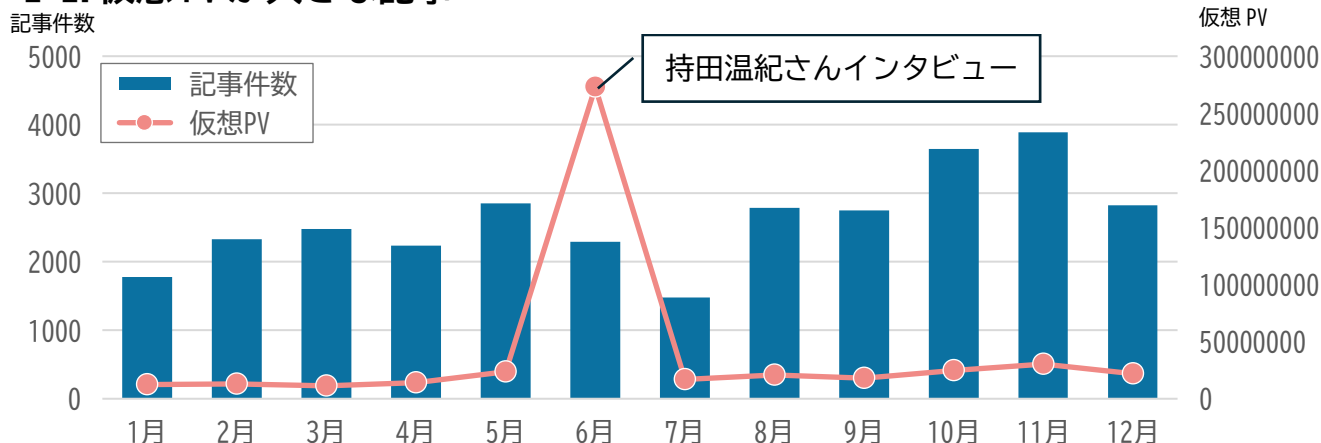
5月にはボランティア募集を巡り、個人情報をも本人の同意なく登録したことが明らかとなり、名古屋市議会副議長が就任から8日で辞任する事態に発展したことで、記事件数が増加している。

5位：「車いす」523件／3,964,403 pv

「車いすバスケット」や「車いすハンドボール」「車いすラグビー」等、各種競技も含まれる。それぞれ大会情報のほか、選手との交流イベントなども多い。パラスポーツ体験イベントでは「ボッチャ」と並び「車いすバスケット」が扱われることも。

「車いす」単体では、スポーツに使える車いすの寄贈といった記事が多く見られた。

2-2. 仮想 PV が大きな記事



持田 温紀さんインタビュー記事

事故によって車いすユーザーとなるも、パラダンススポーツと出会い、車いすダンサーとなった持田 温紀さんのインタビュー記事が2億5,723万4,705pv と、圧倒的であった。

持田さんが「パラ大学祭」というパラスポーツ大会の運営代表をしていることから記事を取得。競技そのものに限らず、個人の持つストーリーが共感性を呼ぶことが表れている。

https://sdgs.yahoo.co.jp/originals/267.html?cpt_m=uhd&cpt_n=UHD&cpt_s=all

Yahoo! JAPAN SDGs

記事発見日：2025/6/23

仮想ページビュー：257,234,705 pv

車いすテニス・小田 凱人選手の動向

持田さんのインタビュー記事以外では、デフリンピックやパラ水泳世界選手権など、代表選手へのインタビューに100万pvを超える記事が複数見られ、特定の話題に集中することはなかった。また、記事の内容から、それぞれの競技や試合結果よりも、選手個人の背景への関心が高いと言える。

極端に大きくはならないものの、年間を通じて比較的高い仮想PVを記録したのは、車いすテニスの小田 凱人選手に関する記事。小田選手の背景がうかがえるものや、史上最年少で生涯ゴールドスラムを達成した際の「車いすテニスで億稼ぐ」や、年末の「車いすに乗りたいと思わせる」といった本人の発言が取り上げられている。

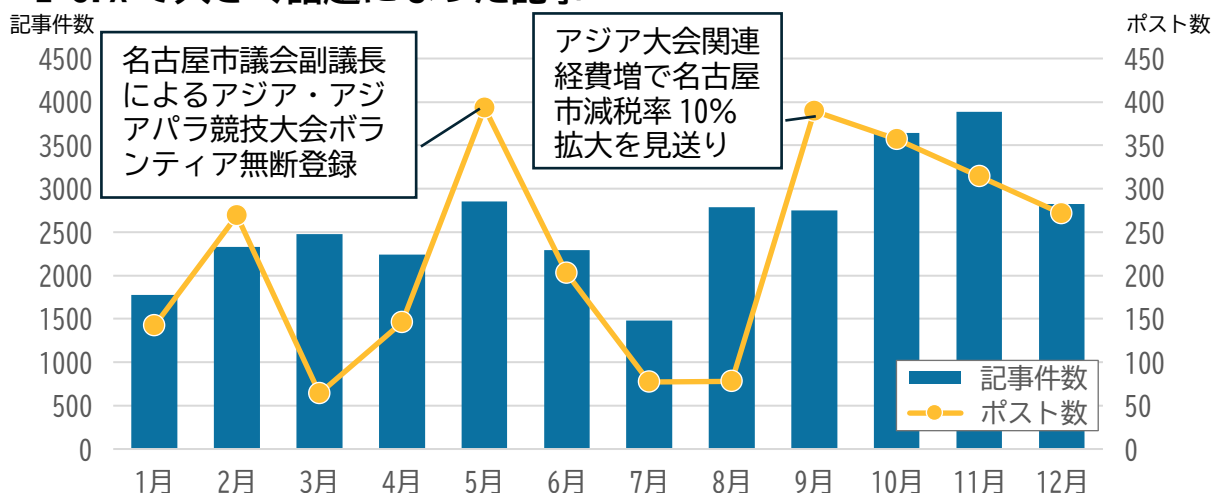
<https://news.tennis365.net/news/today/202509/154116.html>

テニス 365

記事発見日：2025/9/8

仮想ページビュー：81,826 pv

2-3. X で大きく話題になった記事



名古屋市議会副議長によるボランティア無断登録

記事 URL を含む X のポストが多かった記事は、2025 年 5 月 27 日の 2026 年アジア競技大会・アジアパラ競技大会のボランティア募集を巡り、個人情報 を無断で登録した問題の責任を取り、名古屋市議会の副議長が辞任したことを伝える内容。いくつかの記事がそれぞれポストされ、合計値として大きくなっている。

<https://www.yomiuri.co.jp/national/20250527-0YT1T50143/>

読売新聞オンライン

記事発見日：2025/5/27

仮想ページビュー：13,610pv

ポスト数：23 / リポスト数：108 / いいね数：217 / フォロワー数：893,600

アジア大会関連経費増で名古屋市減税率 10%拡大を見送り

名古屋市長は 2026 年度からの市民税の減税率を 10%に拡大することを公約に掲げて当選したが、アジア競技大会・アジアパラ競技大会などの財政圧迫により見送ることになったとの報道が複数あり、こちらもそれぞれポストされている。

<https://mainichi.jp/articles/20251009/k00/00m/040/102000c>

毎日新聞

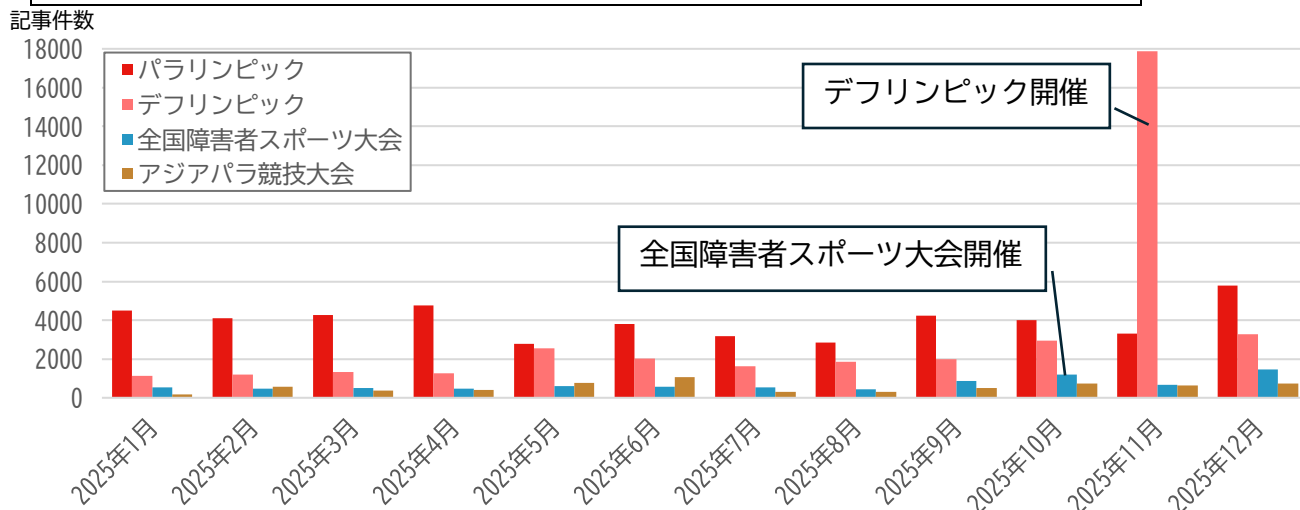
記事発見日：2025/10/10

仮想ページビュー：12,555pv

ポスト数：5 / リポスト数：61 / いいね数：156 / フォロワー数：983,135

3. <パラスポーツ基幹大会>プロジェクト調査結果

パラリンピック、デフリンピック、全国障害者スポーツ大会、アジアパラ競技大会に関する報道を抽出し、大会別の関心度や露出特性を分析



デフリンピック

1月は開催年に入ったことにより、大会概要に関する報道や、協賛企業によるプレスリリースが多く配信された。2月以降、PRイベントの開催や、ボランティア募集、開閉会式の出演者募集など、準備に関する記事が増加していく。

5月に入ると代表内定に関する記事が多くなる。6月中旬以降、デフリンピック開催をPRするキャラバンカーが全国各地を訪問し、大会理念や開催意義に関する報道が増加した。また、内定した選手や支援体制に焦点を当てた報道が増加。競技特性とともに、選手の活躍を通じてデフスポーツの理解が深まる内容となり、デフリンピック本番に向けた期待感を高める報道が目立っている。

8月には100日前セレモニーが開催され、選手の出身地での応援イベントや表敬訪問に関する報道が、直前となる10月まで増加していった。

11月は、開幕から閉幕までを通じた集中的な報道により、年間を通して最大級の注目を集めた月となった。運営体制や国際手話通訳者・ボランティアの配置など、大会規模と国際性を示す記事が多く配信された。日本選手団が過去最多となる51個のメダルを獲得したことも大きな話題となり、健聴の競技団体や指導者との連携、味の素ナショナルトレーニングセンター（NTC）の活用といった強化体制の進展が、日本躍進の要因として注目された。

大会終了後、12月に入ると、評価・検証フェーズとしての報道が中心となった。大会は入場無料で延べ28万人となる来場者を集め、日本選手団は過去最多となる51個のメダルを獲得するなど、大きな成果を残した。一方で、運営費約130億円の多くが公費で賄われた点について、作家・乙武洋匡氏による問題提起が報じられ、「成功とは何か」「レガシーをどう残すのか」といった視点での議論が広がった。また、選手インタビューなども多く掲載され、東京2025デフリンピックが日本パラスポーツ全体の評価を押し上げる大会であったことが、年末の総括として強調された。

パラリンピック

11月のデフリンピックを除き、年間を通して4大会では最も記事が多い。月によっては全国障害者スポーツ大会、アジアパラ競技大会と比べ10倍以上の差がつくこともあった。年間の合計値で見ても、デフリンピックよりも8,549件多い。

記事の内容としては、競技結果において選手の経歴として記載されているほか、メダリストや過去の代表選手が出席するイベントなどのプレスリリースも多く見られた。また、12月に入ると、2026年3月に開催のミラノ・コルティナ冬季パラリンピックに向けての記事が増加している。

仮想PVでは、大阪・関西万博のイタリア館閉館式で、ミラノ・コルティナ冬季五輪・パラリンピックの関連イベントとして展示されていた聖火リレーのトーチが本国に返還される、というものが1億6千万pvを超えた。2025年の大きな話題である万博と、2026年の冬季五輪・パラリンピックという組み合わせが関心を集めた。

全国障害者スポーツ大会

1月1日付でアーティストの西川 貴教さんがPR大使に就任。自身が開催する「イナズマロックフェス」の収益の一部の寄付や、小学校への訪問など、10月の開催まで多数の記事があった。

10月の大会期間中には、「佳子さま」を特徴的なワードとしてAIが抽出している。秋篠宮ご夫妻が開会式に出席、佳子さまは水泳競技を観戦している。佳子さまはこれに加えて、県内の福祉施設訪問の様子なども関連して報じられた。

上記「佳子さま」に関する報道をはじめ、全国障害者スポーツ大会に関しては、競技の結果よりも、大会の開催そのものを主体とした記事が多い。2025年の滋賀県開催だけでなく、2026年の青森県開催へ向けてのイベント、2027年の宮崎県開催へ向けての競技会場完成など、この先の大会に関する記事も多く見られる。

アジアパラ競技大会

2月には松平 健さん、大久保 佳代子さん、武井 咲さん、INIへの公式アンバサダーの委嘱式が行われ、記事数および仮想PVが増加した。一方で、3月以降は大会準備を巡って、ボランティア募集の苦戦や協賛金集めの遅れなど、運営面の課題に焦点を当てた報道も多く見られる。

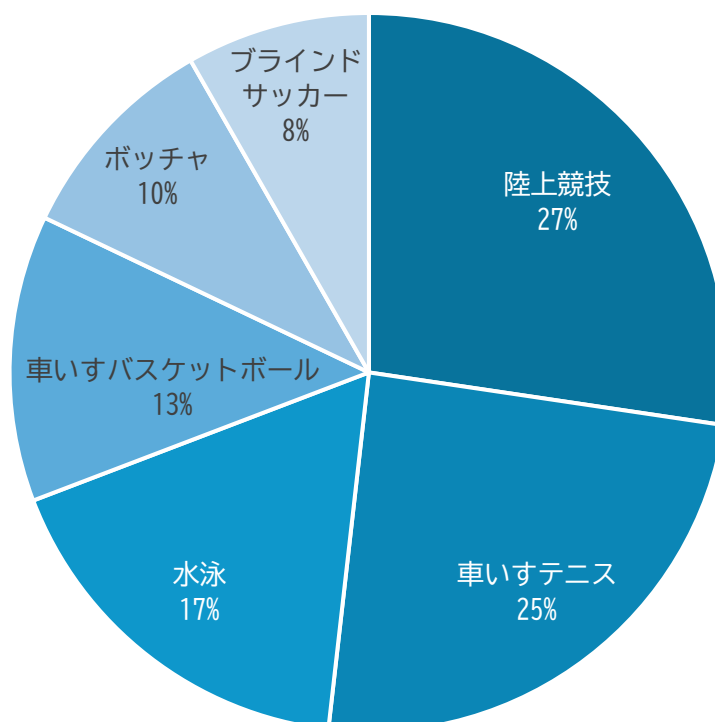
5月に入ると、アジア競技大会まで500日を切り、アジアパラ競技大会も含めて準備の進捗に関する報道が多く見られた。ボランティア募集を巡っては、月末に市民26人の個人情報をも本人の同意なく登録したことが明らかとなり、名古屋市議会副議長が就任から8日で辞任する事態に発展した。また、大会運営などを要因とする財政圧迫により、名古屋市の市民税の減税率10%への拡大を見送るなど、ネガティブな話題が目立っている。

アジアパラ競技大会開催500日前となった6月も引き続き記事数が多いが、以降は協賛イベントの開催や選手団団長らによる会場視察などがあるものの、記事数としては落ち着いていった。

4. <パラリンピック競技>プロジェクト調査結果

夏季・冬季全パラリンピック競技を対象とし、競技別の露出量や話題性の違いを分析
 ここでは記事数と仮想 PV、それぞれ上位 6 競技を抽出した

記事数が多い競技



「陸上競技」はニューデリー2025 世界パラ陸上競技選手権の影響が大きい。32 名が出場し、金メダル 4 個を含む 14 個のメダルを獲得した。「陸上競技」は世界選手権での競技種目の多さのほか、大分国際車いすマラソンといった大きな大会が記事数を伸ばす要因となっている。

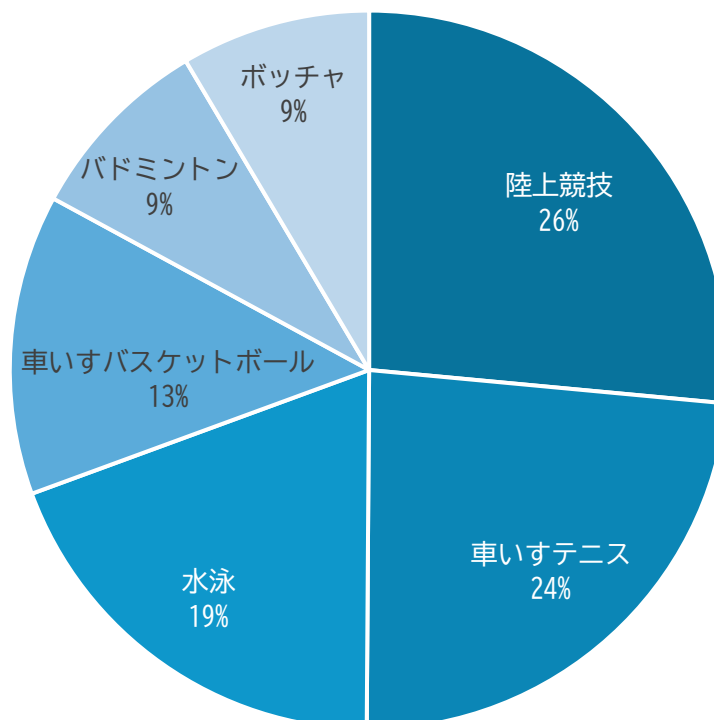
「車いすテニス」は、主に小田 凱人選手の活躍によるもの。史上最年少での生涯ゴールデンスラム達成や全仏 3 連覇、本人による発言内容やイベントへの出席など、年間を通じて多くの掲載が見られた。

「水泳」もシンガポールで行われた世界パラ水泳選手権の影響による。水泳は 21 名が出場、金メダル 1 個を含む 9 個のメダルを獲得した。

「車いすバスケットボール」と「ボッチャ」は、大会に限らず、体験会など各種イベントなども多く開催されたことで、記事数が増加した。

「ブラインドサッカー」は、日本選手権や「ダイセル ブラインドサッカーウィーク in うめきた」といった大きな大会があったことと、各地で体験イベントが開催されていることが記事数に影響を与えた。

仮想 PV の大きな競技



上位4競技に関しては、主に記事数に比例している。

個別に仮想 PV が大きかった記事としては、「車いすバスケットボール」天皇杯の天皇御一家観戦の280万8,414pv、パラリンピックに6大会出場し、計20個のメダルを獲得した「水泳」の成田真由美さんの死去621万9,353pvが挙げられる。

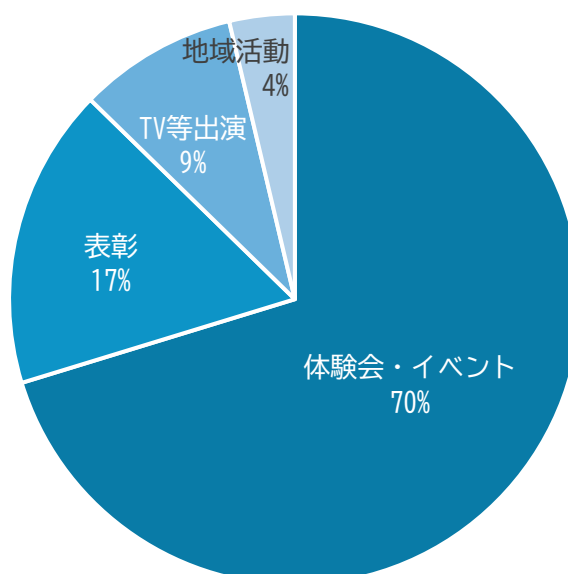
記事数に比例せず、仮想 PV が大きかった競技としては、「バドミントン」と「ボッチャ」が入った。

「バドミントン」は、日本テレビ『24時間テレビ』のバドミントンラリーのギネス世界新記録更新を目指すという企画が影響している。パラバドミントンのメダリストである里見 紗李奈選手と山崎 悠麻選手が、芸能人らと共にこの企画に参加した。

「ボッチャ」は、全国ボッチャ選抜甲子園、BOCCIA JAPAN CUP 2025といった大会結果と、パラスポーツ体験イベントに関するレポート記事の仮想 PV が大きい。

5. <競技以外露出>プロジェクト調査結果

体験会・イベント、テレビ等メディア出演、地域活動、表彰など、競技以外の文脈での露出を整理し、パラスポーツの社会的広がりを分析



体験会・イベント

体験会やイベントに関する記事数は、競技以外の記事の7割を占めることとなった。要因としては、これらのイベントを開催する団体による、ワイヤーサービスを用いたプレスリリース配信が挙げられる。

一方で、各種パラスポーツのPRとして行われている、トークイベントの取材記事も多い。これらは記事数だけでなく仮想PVも大きくなっていることから、多くの関心を集められたと言える。

表彰

記事数の大きなものとしては、1月の「第8回日本パラスポーツ賞」がある。パリ2024パラリンピック競技大会 金メダルの車いすラグビー日本代表が大賞を受賞した。

ほかにも、各地方自治体による障害者スポーツ賞が発表され、地方局や地方紙メディアに掲載が見られる。

TV等出演

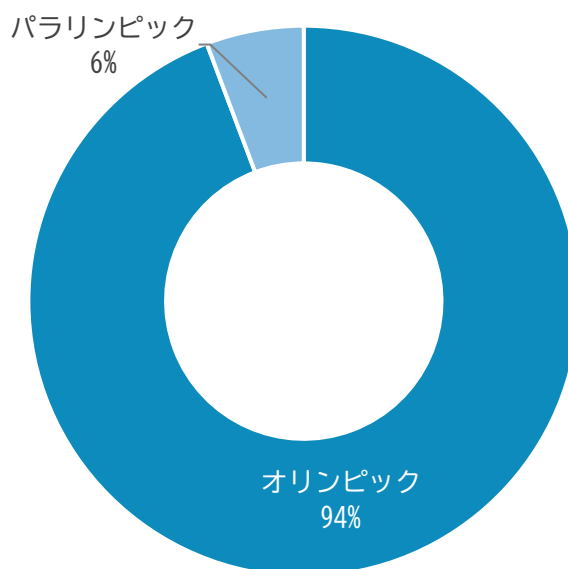
8月に日本テレビ『24時間テレビ』に関する記事数が増加。バドミントンラリーのギネス世界新記録更新を目指す企画などの「パラアスリートスゴ技チャレンジ」や、「パラスポーツ応援募金」が行われ、記事数のみならず、仮想PVも大きくなった。

地域活動

パラアスリートの地域での活動に関する記事は、年間を通して1,037件、全体の4%と最も少ない。主な内容としては、大きな大会後にメダルを獲得した選手が知事などに表敬訪問を行っている。

5. <パラリンピック・オリンピック比較>プロジェクト調査結果

パラスポーツがスポーツ全体の中でどれくらいの位置づけであるか把握するために、「オリンピック」と「パラリンピック」のキーワードを比較した



総記事数 298,777 件のうち、オリンピックの記事数が 94%に対し、パラリンピックは 6%にとどまっております。報道量には大きな差が存在している。この差は、競技規模や開催期間の違いだけでは説明しきれず、社会的認知度やメディアにおける優先順位の違いが影響していると推測される。

オリンピックは長年にわたり国民的イベントとして定着しており、競技結果に加えて、代表選考、スポンサー動向、開催地の経済、選手の私生活や人間ドラマなど、多様な切り口で報道が量産されやすい。一方、パラリンピックは大会期間中の報道は一定量確保されるものの、開催前後の継続的な露出や競技以外の話題展開が現状では限定的であり、年間を通じた記事数が伸びにくかったと推測される。

また、パラリンピックは「専門性が高い」「説明が必要」とメディア側の前提知識や編集判断、社会的関心も影響しているのか、速報性や話題性を重視する一般ニュース枠では取り上げられにくい傾向が見られる。

パラリンピックに見られる特徴として、皇室のご臨席、社会的メッセージ性の高い発言、共生社会やインクルージョンをテーマとした記事は、単発ながら高い仮想 PV や SNS 波及を生んでいる。

総合的に見ると、パラリンピックは「関心が低い」のではなく、「語られる文脈と機会が競技だけとは限らない」ことが浮き彫りになった。今後は、競技結果に加えて、社会、教育、ビジネス、文化と結びつけた情報を発信することで、量・質の両面でオリンピックとの差を縮めていく余地があると言える。

総評

2025年のパラスポーツ関連 Web ニュース露出は、「東京 2025 デフリンピック」を最大の軸としながら、競技大会、社会課題、共生・インクルージョンといった複数のテーマが重層的に展開された一年だった。露出が断続的ではなく連続的に積み重なった点が、大きな特徴である。

年初の1~3月は、デフリンピックの大会概要や今後の各種大会関連情報などにより、「パラ」「デフリンピック」といったキーワードの露出が拡大した。加えて、日本選手団の国際大会でのメダル獲得や初優勝といった成果が、日本経済新聞をはじめとする全国紙で取り上げられたことで、記事数および仮想 PV の底上げにつながった。一方で、この時期は競技結果速報型の記事が多く、一般層への浸透には限定的であった。

4・5月にかけては、アジア・アジアパラ競技大会を巡る財政支援要請やボランティア募集、ガバナンス問題など、スポーツを「社会インフラ」として捉える報道が増加した。特に、名古屋市議による個人情報問題は、アジアパラ関連露出を一時的に押し上げる要因となり、パラスポーツが行政・政治の文脈でも語られ得る結果となった。

6・7月は、デフリンピックに向けたプレスセミナーや代表内定選手の活躍、自治体主導の認定制度や体験会の開催が相次ぎ、報道テーマは「大会準備」から「人材育成」「教育・普及」へと広がった。また、「サインエール」の紹介や、ボッチャなどの競技体験を扱う記事は、競技知識の有無を問わず関心を喚起し、裾野拡大に寄与した。

8月には、『24時間テレビ』におけるパラスポーツ応援募金が注目を集め、パラスポーツが「競技」だけでなく「文化」「社会貢献」「企業のサステナビリティ」と結びついて語られる傾向が明確になった。これらは仮想 PV が比較的高く、共感型・ストーリー型の記事が拡散力を持つことを示している。

9・10月は、デフリンピック開催直前期として、協賛契約、教育現場での体験会、企業による選手の採用内定などが続いた。さらに10月には、全国障害者スポーツ大会を佳子さまが観戦している。皇室関連の報道は、単一記事あたりの仮想 PV が高く、障害者スポーツ全体への注目度を一段階引き上げる効果をもたらした。

11月のデフリンピック大会期間中は、記事数・仮想 PV とともに年間最大となり、日本選手団の過去最多メダル獲得、国際的意義、運営体制、手話通訳やボランティアの役割など、多角的な報道が展開された。競技の枠を超えた社会的インパクトが可視化された点は、2025年の最大の成果である。

12月には、デフリンピックを総括する論考や検証記事が増加し、成功の評価と同時に、運営費や財源といった課題に踏み込む報道も見られた。これは、パラスポーツが単なる感動物語ではなく、持続可能性や社会的責任を伴う公共事業として認識され始めていることを示している。

一方で、オリンピックとパラリンピックの記事数を比較すると、オリンピック 281,884 件に対し、パラリンピックは 17,148 件と大きな差が存在する。量的格差は明白であるものの、2025年のデフリンピック関連報道では、テーマの多様性が高く、影響力に関する指標（仮想 PV や SNS 波及）では一定の成果を上げたと評価できる。